

人間を
幸福にしない、
日本という
システム

カレル・ヴァン・
Karel van Wolferen
ウォルフレン

篠原勝 訳

人間を 幸福にしない、 日本という システム

カレル・ヴァン・
Karel van Wolferen
ウォルフレン
篠原勝 訳

本書は日本の読者を対象
に書き下ろされたオリジ
ナルです。(編集部)

人間を幸福にしない日本というシステム

第1刷 1994年11月30日

第29刷 1998年3月25日

著者 カレル・ヴァン・ウォルフレン

訳者 篠原 勝

編集人 光田 烈

発行人 山本 進

発行所 毎日新聞社

〒100-8051東京都千代田区一ツ橋／〒530-8251大阪市北区梅田
〒802-8651北九州市小倉北区紺屋町／〒450-8651名古屋市中村区名駅

※乱丁・落丁本は小社でお取り替えます

書籍営業部03(3212)3257・第一図書編集部03(3212)3239

本文印刷 中央精版

カバー・表紙印刷 三興印刷

製本 大口製本

©1994 Karel van Wolferen Printed in Japan

ISBN4-620-31019-0

For Yoshino Okubo and Mas Shinohara

Without whom I could not be publishing books in Japan.

大久保慶の、篠原勝に

二人を抜きに私の日本での執筆出版活動は語れない

謝 辞

本書の出版を勧め、これまでの私の読者層より広い日本人層に語りかける機会を与えてくれた毎日新聞社出版局の編集者諸氏に感謝する。日本の社会・政治・経済システムへの私の分析と、日本に民主主義を実現するためのアイデアの数々は、長い年月をかけて、私の頭のなかに具体的な姿を現してきたものである。その間の、知的熟成を助けてくれた人々をすべて名を挙げて謝意を表することは不可能である。幸いにもさまざまな職業や立場の日本人との対話や彼らの発言、さらには質問から、私は多くを教えられた。

ここで特に名を記したい人の筆頭は、毎日新聞社の志摩和生氏である。本書の出版に注がれた彼の情熱と絶えざる励まし、多くの提案、わけても着想の段階からはじまって実際に印刷にかかるまで、本書の制作進行を終始一貫、細心の気くばりで管理されたことに感謝する。氏のすぐれた編集技術に惜しめない賞賛を呈し、執筆する側の私にとってこの上なく友好的で頼りになる、

望みうる最良の編集者であると記しておきたい。

ウィリアム・ウェザーロール、三國陽夫、タグ・マーフィーの各氏は草稿を読んで意見を述べてくれた。田所義丸氏は本書の着想段階から励ましを頂いたことにお礼を申しあげる。

ほかに二人が本書出版に欠かせない役割を引き受けてくれた。大久保慶よしの氏は私の日本に関する論文の多くに貴重な意見を述べてくれた。長年私のアシスタントをつとめている彼女の調査能力は私の執筆活動には不可欠であり、ほかにも事務所の仕事を切り盛りしてくれるおかげで、心おきなく私は執筆に専念できる。訳者の篠原勝氏は、私の論点を歪曲なしにストレートに日本の読者に伝えてくれることでは安心して訳を委まかせられるという意味で同じく不可欠である。彼とは二十年来の友人で、著者と訳者の関係でこれ以上いい関係はない。そんなわけで、友人でありパートナーでもあるこの二人に本書を献呈することにした。

目次

謝 辞

第一部 よい人生を阻むもの 11

第一章 偽りのリアリティ 13

第二章 巨大な生産マシーン 38

第三章 麻痺した社会の犠牲者たち 64

第四章 官僚独裁主義 87

第二部 日本の悲劇的使命 127

第一章 日本の奇妙な現状 129

第二章 バブルの真犯人 178

第三章 不確実性の到来 205

第三部 日本はみずからを救えるか？ 227

第一章 個人のもつ力 229

第二章 思想との戦い 247

第三章 制度との戦い 286

第四章 恐怖の報酬 312

第五章 成熟の報酬 325

装幀
菊地信義

人間を幸福にしない
日本というシステム

凡例

本文中、本文と同じ大きさの（ ）内の記述はすべて著者によるもの、小字の（ ）と〔 〕内は訳者ないし編集者の注である。

また、人名への敬称は原則、省略した。

第一部

よい人生を阻むもの

第一章 偽りのリアリティ

「この人生はどこかおかしい」と多くの日本人が感じている。それはなぜか？

居心地の悪さを感じている人の数は、実際、驚くほど多い。そしてこの不満は、あらゆる世代、ほとんどの階層に広がっている。

その不満の原因は、人間だれしもがしよいこむ個人的問題や家族にまつわる厄介事だけではない。周囲の社会の現実も、なにかモヤモヤとした不満の原因になっている。

「マンガ」を見れば現代日本の大衆の意識がよくわかる。そこでは「サラリーマン人生」がとも自嘲的に描かれていて、人々が感じている現実の苦々しさがよく伝わってくる。なぜ、この国には学校嫌いの子供がこれほど多いのか？

なぜ、この国の大学には、表情が暗く、退屈そうで、なんの理想もないとすら見える学生がこれほど多いのか？

なぜ、この国の女性は世界一晩婚なのか？　そして、なぜ結婚しないと決めてしまった女性の数も驚くほど多いのか？　また子供を産まないと決めた女性も多い。なぜか？

これらの現象は、世界でも日本にだけひととき目立つ現象だ。この国の人々の、顔に貼りついたような笑顔や不自然なはしゃぎかたの下に、その素顔を垣間見てしまった外国人には、この国は「うちひしがれた人々の国」だとわかる。

日本の社会はゆがんでいる。死・事故・失恋・貧困といった運命ともいうべき理由ではなく、社会のひどいゆがみのせいで大きな悲劇に見舞われた人の例を、あなたも身近にご存じだと思う。私も、自分の身近で最近起こった例を挙げてみよう。

五十六歳の男性。三十年余、会社一筋に勤めあげて退職し、妻と水入らずの暮らしを始めたところだった。しかし、一年とたたないうちに妻から離婚を求められた。二人きりになってみると共通の話題ひとつなく、彼は彼女の人生のお荷物でしかなかったというわけだ。

そういえば、退職金が入ったとたんに離婚を申し出る妻たちがいることは私も聞いていた。「濡れ落葉」という表現をあなたはご存じだろう。

次は十三歳の中学生の女の子の例。生まれつきのクセ毛のせいで「イジメ」に遭った。彼女はクセ毛を直そうとあらゆる努力をしたのに、かわいそうに許してもらえなかった。